

やまたらけ

YAMADARAKE

DECEMBER

No. 83

2017

オヤジの 誂え

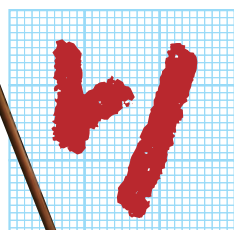
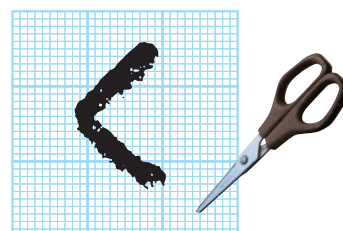
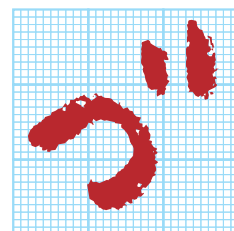
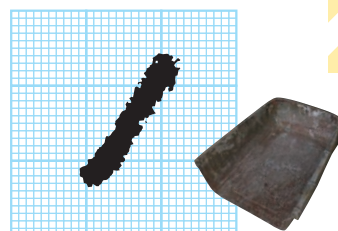
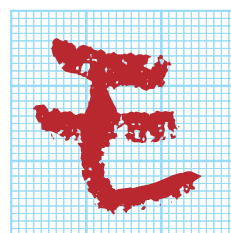
あつら

早川の息吹、ものづくり。

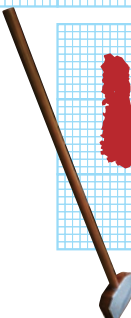


特集！

Vol. 83



●文〓青沼 寛子



「モノづくり」をしたことは、ありますか？例えば、子どもの頃の夏休みの自由工作？それとも、家族旅行で工芸体験？今回の特集は、早川町の「モノづくり」について。
かつてモノが手に入りにくかった早川町では、周辺にあるもので道具をもつくるのが良くあった。
現在でも多くの方が早川町でモノづくりを楽しまれている。
例えば、削ったときの木の香りや、木を乾燥させた時の色の変化など、その過程も楽しみのひとつかもしれない。
そんなモノづくりの楽しみや、精神を望月忠紀さんにお話を伺いながら紹介したいと思う。



伺ったのは、11月の秋晴れの日。自宅へ行くと裏の小屋にいらるとのことだったので、裏手にまわり、石の階段を上る。すると、作業をしている人の姿がみえた。納屋の入り口で座って桑の木を切ったり、道具をさがしたりしている。忠紀さんだ。忠紀さんは現在、自宅の納屋を工房にしてモノづくりを続けている。

納屋の中は道具であふれんばかり。しかし、道具の場所を忠紀さんは全て把握をしていて、納屋はまるで「忠紀さんだけに使いやすいカスタムされた道具箱」のようだ。
さっそく作品について話を聞くと、少しだけ照れながら納屋の奥から色々なモノを次から次に出してくれた。そしてその工程ややりがいについて、笑顔で語ってくれた。その笑顔をみているだけで、すでにモノづくりに対する想いが伝わってくるようだ。

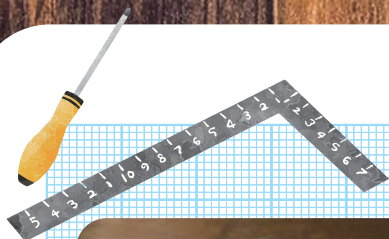
今回の主人公

Profile

望月 忠紀 さん

保集落に在住。茂倉集落に生まれ、父が大工だったこともあり、子どもの頃からモノづくりが身近にある環境で育った。郵便局員として東京などで勤めていたが、定年後早川町に戻り、趣味の創作活動が続いている。





無造作に立てかけられている道具の中にも手づくりのモノがいくつも見られる。写真の熊手は、側溝の落ち葉などをまとめる際に活躍する。



上:二丁差しの刃物ケース。製作したケースは20丁分以上にのぼる。
下:小屋の中にはモノづくりに使う道具類や材料が所狭しと並んでいた。
廃材や、切れ端なども形状などで分類して整理されている。

あるモノを分解して つくる楽しさ

まずは、刃物ケースを見せてもらった。刃は、ケースにピッタリ収まっており、既存の製品ではないのかと思うほど違和感がなかった。思わず「これが手作り？」と驚いてしまうほど。

忠紀さんは、何かをつくらうと思った時、まずそのモノを全て分解するところからはじめるそうだ。刃物ですら形を理解するために分解する。そこから「これを、どんなモノに変えようか」、「こう

やってみようかな」、「どうしたら使いやすくなるかな」など、完成を思い浮かべながら、新しいモノをイチから組み立てるように作っていく。忠紀さんはモノをつくる前、「モノのしくみがわかること」から楽しんでいるのだ。

時間をかけてつくる こだわり

忠紀さんは、元々モノづくりの仕事をしていたわけではない。早

川町に戻り、郵便局の仕事をしつつ合間にモノづくりをはじめ、かれこれ10年。今では日々の趣味となっている。作品を紹介してもらった際には、「何かつくる時には、一気につくらず、少しずつ作っていくことが楽しい」と、笑顔で語っていた。

見せてもらったグランドゴルフのクラブは、1本1本が形も色もまったく違っていった。同じクラブでもつくる中で形が変わっていく所に、「こだわりのような想いを感じる」。

忠紀さんは、実際は数日でできてしまうものも、数週間や数か月ほど時間をかけてじっくりつくる。というのも、つくりながら、「柄の素材を変えた方がいいのではないか」、「ニスを塗らない方がいいのではないか」と想像して、工夫に工夫を重ねている。道具の修理依頼も多いが、無期限なのが条件だそう。

出来上がりを楽しむだけでなく、時間をかけて考えること。その過程自体がモノづくりの醍醐味になっている。

自分で直す事が さらに良いモノを生む

次に、修理をしながら使っているモノも見せてもらった。納屋にあった刈払機は、作業中に折れてしまった取っ手を直して使っていた。もともとの取っ手ははずし、忠紀さんが一番好きな桑の木でつくった取っ手を付けて使っている。前に使っていたモノよ

り持ちやすくなったとのこと。これは、どこにも売っていない、世界にただひとつだけのモノだ。

「壊れたものを直すのに、パーツを買ってきたら簡単だけど、用途が決まっているからそのまましか使えない。だから、自分で新しいモノを継ぎ足しながら直す」と忠紀さん。

刈払機だけではない納屋にある多くの道具やハサミですら

も、自分に合うものにしたという想いから直しながら使っている。

モノを捨てる際、早川町の人の脳裏に浮かぶのは、「捨てずに修理したり、つくり変えたりできないか」「修理したりつくり変えたりする時の部品にできないか」といった事なのかもしれない。忠紀さんの納屋の中にも、他で使われていたであろう、板や部品

がいくつもストックされていた。

「改良を繰り返す。そうして一番いいと思うモノをつくる。それが醍醐味のひとつだ」と忠紀さん。そこには、「あるモノをより良くする」という精神を感じる。

モノづくりを続ける想い

いきいきと語る忠紀さんから、モノづくりをこれからも続けていきたいという想いを感じた。奥さんには「自分の好きなことばかりやって！」と言われてしまうそうだが、楽しいからやめることができないようだ。

忠紀さんの「モノづくり」のルーツはどこなのだろうか。聞けば、元々お父さんが大工で、昔からモノづくりが近くにあったのだとか。生まれの茂倉集落は、昔は大工が多かった。忠紀さんは、子どもの頃から大人を真似て、カンナなどの大工道具を使っては怒られていた。そうした子どもの頃の環境が、今にも影響しているのかもしれない。

「この先もモノづくりを続けた

作品紹介

グランドゴルフのクラブ

色合いもデザインも全く違う5本のクラブの素材は、忠紀さんが好きな桑の木。聞けば、「ニスを塗らず置いておいたものは、自然と色が変わりいい色味になる」のだとか。数本は別の素材をつけてデザインを変えている。ボールを打つ面は木板を張り合わせていてさらに補強のために、アルミが貼られていた。まるで、専門店で置いてありそうな仕上がりが。さらに、ゴルフクラブのケースも自作なのだそう。釣り用のウェダー（スポン付きの長靴）、スポンの部分を切りとって、クラブ用のサイズに合うよう縫い合わせたもの。

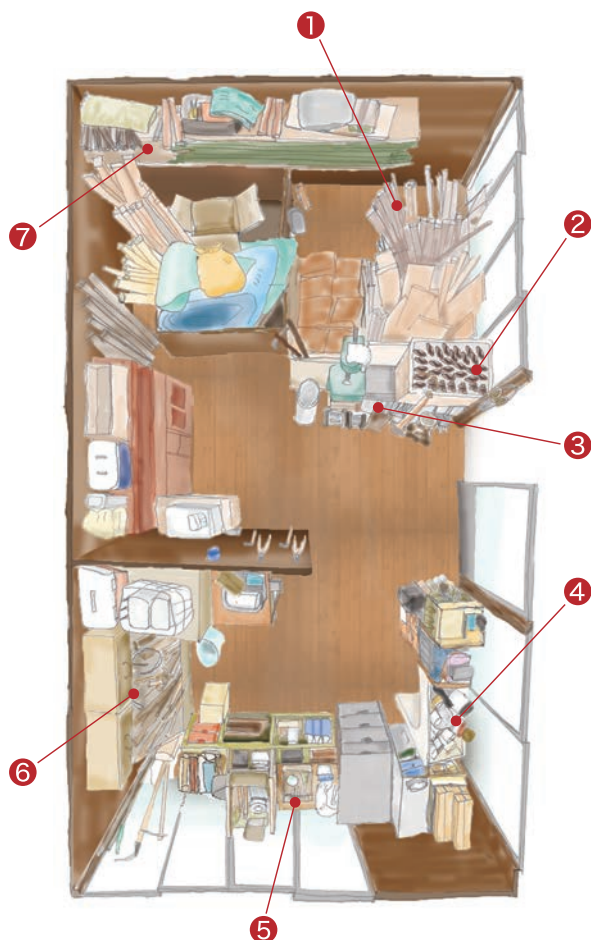
刃物ケース

刃物ケース。忠紀さんは父からもらった刃物を沢山持っていて、今も愛用している。用途によって刃の形が違うため、形に合わせて何種類もつくっていた。柄もすべて自作。

刈払機

長年使っていた刈払機の持ち手が壊れてしまった時には、壊れた部分をカットし、形を変えて付け直した。他にも桑の木の素材に取手をつけ直したものも。元々の取手よりも気に入っている。

忠紀さんの作業場(平面図)



- ①板や木材が整理して保管されている。
- ②20丁くらいの二丁差し。
- ③鉄や木に穴をあける機械や、研磨用の機械が並ぶ。
- ④釘やボルトが小分けに整理されている。
- ⑤モノづくりに必要な道具が無数に並ぶ
- ⑥手づくりの道具がいくつも立てかけられている。
- ⑦壁には手づくりの棚が据えられている。

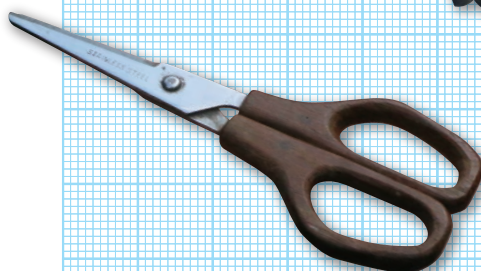
裁断機

ある時スイッチの部分が壊れてしまった裁断機。メーカーに聞いても部品が無いので直せなかったため、自分で分解、配線を確認した上で、別のスイッチを取り付けた。



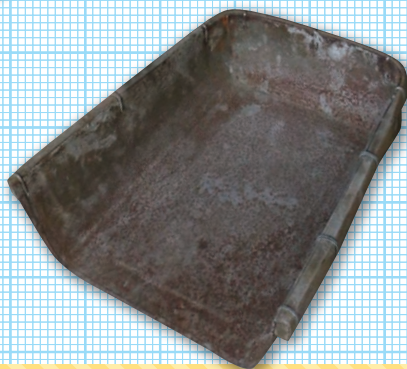
ハサミ

ハサミの柄のところが壊れてしまい、山から取ってきた桑の木を使って作り直した。桑にこだわるのは、樫よりも硬さがちょうど良く、加工しやすいから。



箕(農具の一種)

一斗缶を半分に切ってつくった。初めて作ったものは、持ち手部分に竹を取り付けたが、いざ使ってみたら、使いにくく、もう一度挑戦。今度は持ちやすさを考えて、一斗缶の持ち手部分に穴を空け、改良した。満足の出来上がり。



柵

小屋の裏手にある畑の囲いは獣害から作物を守るためのもの。鉄のパイプを切って、枠を立てて網を張ってつくっている。クロスする部分は、ログハウスのように、片方をカットしてつくられていた。クロス部分は複雑なため、最初に簡単な模型から型をとってつくっていた。柵自体も複雑な作りだが、驚いたことに、図面はなく、すべて頭の中で考えられていた。中には、イノシシから作物を守るため、下面をガードレールで守っているものも。柵を獣に破られる度に改良を重ねてできた形だそう。



い」と、忠紀さんは言う。忠紀さんの創作意欲に果てはない。かつてはモノが手に入りずらかったことや、既製品では対応できない自然環境や暮らしが独自のモノづくりの文化が生まれた背景なのかもしれない。

現代では、沢山の「モノ」が溢れており、モノを購入することが「普通」の考え方になりつつある。

それでも、手間をかけただけ自作したモノに愛着が湧く。色々なモノを組み合わせながら「より使いやすいもの」と考えながらつくる過程は、想像力を掻き立てる。今回の取材ではそうしたモノづくりの楽しさに触れることができた。

早川町には、そんなモノづくりの精神が至る所に転がっている。忙しい日々の中、たまには気分転換も兼ねて、あなたも「モノづくり」に挑戦してみるのはいかがでしょうか。



やまだらけ編集部がある 「日本上流文化圏研究所」の紹介

今回のやまだらけでは、早川で息づく「モノづくりの精神」を特集しました。他にも早川には歴史、文化、技術、知恵といった様々な地域資源が息づいています。

上流研では、これまで、そういった資源を地元の方達と一緒に掘り起こし、冊子やホームページといった形で発信してきました。

こうした取り組みは、地域資源の記録だけが目的ではありません。早川の暮らしの魅力を若い世代が受け継ぎ、将来に残していけるように。また、その中で地域を支える人材が育ち続けるような山村をこれからも目指していきます。皆様のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

奥山冥利 <http://fm-hayakawa.com/>

これまで上流研で掘り起こしてきた地域資源を整理し、発信していくサイトです。早川町の「分かりやすい魅力」から「知る人ぞ知る魅力」を紹介しています。情報紹介だけでなく、実際に存在する施設や人、資源などとの繋がりが見えるような、読むほどに楽しめる作りを心がけています。今後も記事が増えていく、現在進行中の取り組みです。



早川マインド <http://fm-hayakawa.net/mind/> 旧 2,000 人の HP

平成 10～16 年を中心に取り組んできた早川町民の生活や生き様を顔の見える形で紹介したホームページ。個々の記事の中に山村生活で培われた技術や知恵を垣間見る事ができます。平成 28 年に「早川マインド」としてリニューアルしました。



やまだらけ

インターネットやまだらけからバックナンバーを無料でダウンロードできます。
(<https://joryuken.jimdo.com/magazine/>)

平成 15 年から始まり早川町の地域資源や、技術・知恵を持っている人を紹介してきました。現在は上流研の会報として、「あるものを活かす」「自主的」「他者への協働・貢献」などをキーワードに人や取り組みの紹介に力を入れています。



めたきナシ

購入は上流研（裏表紙参照）または、早川旬の直送便 (<http://shop.joryuken.net/>) まで。

方言で「たくさん聞きなさい」の意味。このガイドブックを片手に町内を巡る中で、町民との交流や、早川町の魅力を感じて欲しいという想いで作りました。制作には 100 名を超える町民が参加し、掘り起こした 600 以上の地域資源の中から、厳選に厳選を重ねた 195 個のお宝が地区別にまとめられています。現在、電子書籍化、合体版製作に取り組んでいます。



山人ルーツ

上流研 HP から無料でダウンロードできます。
(<https://joryuken.jimdo.com/発行メディア/>)

平成 27、28 年度の取り組み。早川の人々の「たくましい生き方」を記録すると同時に、早川の生活文化を取り入れた、楽しく、豊かな暮らし方を伝えていきたいという想いで作りました。若い方でも馴染やすいよう、雑誌風なつくりになっています。



はやかわおもいでアルバム

<http://fm-hayakawa.net/photo/index.php>

平成 24 年から始まった取り組み。かつての早川の様子や暮らしぶりが分かる古写真を収集し、そのエピソードとともに紹介しています。



上：昭和初期の雨畑硯製造組合の作業風景

2017
冬

奥山の冬を楽しもう！

早川町観光イベントニュース！

2月

17～18日

南アルプス生態邑イベント

カエデの樹液採集とメイプルシロップづくりツアー

和製メイプルシロップを作ってみよう！
イタヤカエデの木からは糖度が高く
香り豊かな樹液を採取することができます。

しかし、樹液が採れるのは1年間のうち2週間だけ！
森を歩いて自分の足で採った木から樹液を直接集めて、
シロップを作りましょう！



日程：2018年2月17日（土）～18日（日） 1泊2日

対象：中学生以上

参加費：大人 15,000 円（税込）／1名

定員：16名

締切：2017年2月10日（土）

南アルプス生態邑 / ヘルシー美里

TEL：0556-48-2621/FAX：0556-48-2622

HP：<http://www.hayakawa-eco.com/>

E-mail：info@hayakawa-eco.com

3月

24～26日

南アルプス生態邑イベント

春のはやかわ子ども探検隊キャンプ けもの博士になろう！

南アルプスの麓で「生きもの博士」になろう！
冒険アイテムを持って森を探検しながら、
色んな生きものたちに迫ります！

食事はもちろんアウトドアクッキング！
火起こしも自分の力でやってみよう！
森のコテージに仲間と泊まって、
生きものの森の冒険を楽しもう！



日程：2018年3月24日（土）～26日（月） 2泊3日

対象：小学2年生～小学6年生

参加費：子ども 32,000 円（税込）／1名

送迎：新宿より専用バスにて送迎あり

定員：15名

後援：早川町教育委員会

締切：2018年3月17日（土）（先着・定員になり次第締切）

南アルプス生態邑 / ヘルシー美里

TEL：0556-48-2621/FAX：0556-48-2622

HP：<http://www.hayakawa-eco.com/>

E-mail：info@hayakawa-eco.com

3月24日

開催！

七面山 白糸滝 増田屋旅館

養珠院お万の方「落語奉納会」

毎年増田屋では、立川談慶師匠をお招きしています。
また、当日は参加者全員に日蓮宗お上人によるご祈祷
もあり、今年一年の幸せを祈願させていただきます。
ぜひ皆さん、お誘い合わせの上お越し下さい。



日程：2018年3月24日（日）＊要予約

詳細は追って、増田屋／早川町観光協会 Facebook に掲載します。

早川町観光協会のHPもCheck!

「奥山梨はやかわ」<http://hayakawakankou.daa.jp>



やまっこの冒険



- No.01 檜の葉のかざぐるま -



望月 保博さん
1933年3月生まれ。
早川町葉袋在住。

今回は葉袋に住む、望月保博さんの知恵をお借りしました。今回教えて頂いたのは、竹と檜の葉で出来たかざぐるま。

保博さんが小さかった頃、山の上にある小学校に通うため、毎日山を上り下りをしなければなりませんでした。学校帰りの山の中で、創意工夫をしながら自分たちでおもちゃを作り、遊ぶことは、楽しみのひとつだったそうです。家に帰ると養蚕のお手伝いをしなければならぬので、学校から帰る山道は、貴重な遊び時間でもあったのです。

そんな檜の葉のかざぐるま作り。今回は早川北小学校に通う二年生の凜宇さんに挑戦してもらいました。

今回のコラムより、やまっこの冒険と題して、早川の子ども達にフォーカスしつつ、早川の今昔を発信していけたらと思っています。

見本を作る保博さんと、凜宇さん



1: 檜の葉をみつけ、葉を4~5枚残し、残りを切り落とします。



2: 細めの竹をみつけ枝を落とし、適度な長さに切ります。



3: 檜の葉の茎を、竹にうまく入るように削っていきます。

完成 !!



走る走る、回る回る！



4: 檜の葉の先端を、1/4 程切り落とします。



5: 先端を切り落とした檜の葉を、



6: 折り曲げた檜の葉を、竹に同一方向に折り曲げていきます。さして完成です！



読者の声

次号予告！(2018年3月上旬お届け)

No.84「よみがえる旅籠」

昨年、赤沢集落の旅籠が甦りました。外国人向けのゲストハウスとして営業を再開した大阪屋旅館。赤沢の歴史とこれからの方向性を紹介します。

▶ 白樺会の長年にわたる活動については、おぼろげに知っていたのですが、たくさんの写真入りでの特集はとても理解を深めました。(匿名希望)

▶ 今回も興味深く読ませて頂きました。こちらでも、伝統行事・文化を如何に伝えていくべきか、考えておられる方々がいますので、白樺会の皆様の取り組みを伝えたいと思います。(奈良県川上村Mさん)

編集部: 白樺会の取組を改めて見ると私達も驚く事ばかりです。他にも、町内いくつかの集落で伝統行事・文化を盛り上げる取り組みが始まっています。こちらでも何かの機会にご紹介できたらと思っています。

やまだらけ定期購読のお願い

「やまだらけ」では、今後も「山の暮らしの価値」と、それを後世に守り伝える人々の活動を応援して参ります。

やまだらけは、広告料と会員の皆様の会費で成り立っています。会員の皆様には、やまだらけを毎月お届けいたします。会員として、この取り組みを支えてください。

【年会費】正会員: 10,000円 賛助会員: 3,000円

【振込先】 ゆうちょ銀行 ○二九店

当座 0095644

【名義人】 特定非営利活動法人
日本上流文化圏研究所

発行元／NPO法人日本上流文化圏研究所

住所／山梨県南巨摩郡早川町葉袋430 〒409-2727

電話／0556-45-2160 ファクシミリ／0556-45-2268

<http://www.joryuken.net/>

都内で暮らしていると、モノづくりをしている方の取材ができる機会はとても貴重でした。最近、モノが充実している方が一般的で、日常生活の中に「モノづくり」は少ないように思います。取材では、自分でもつくりたくなってしまうほどワクワクしました。次に早川町に行くときには、モノづくり体験も探してみようと思います。(青沼 寛子)

山を覗けば宝の山
【やまだらけ】